【一段】

原文	訓読
1 家書告君喪	家書　君が喪(うせ)しことを告ぐ
2 約略寄行李	約略　行李に寄す
3 病源不可醫	病源　醫(いや)すべからず
4 被人厭魅死	人に厭魅(えんみ)せられて死す
5 曾經共侍中	曾(かつて)経　共に侍中たりき
6 了知心表裏	了知す　心の表裏
7 雖有過直失	過直(かちよく)の失有りと雖(いへど)も
8 矯曲孰相比	矯曲　孰(たれ)か相比(あいひ)せん

▼［藤原滋実の陸奥での国守としての功績・徳行］（その一）

妻からの藤原滋実の死を告げる家書が届き、太宰に派遣された使者より、その死に至るまでのいきさつがつかめた。それは病気や事故によるものではなく、呪詛によるものであることが判明する。その想定外の友の死に、道真は言葉を失う。と同時に、滋実の生前の在りし姿が道真の脳裏にありありと甦ってくる。この【一段】では、滋実と自分との関わりの契機、そして滋実の顕著な性格、（それは正直過ぎて一本気な所はあるが、とにかく不